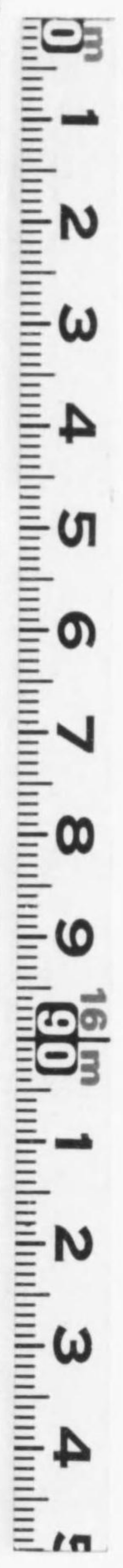


特 260
210

菅原時保禪師

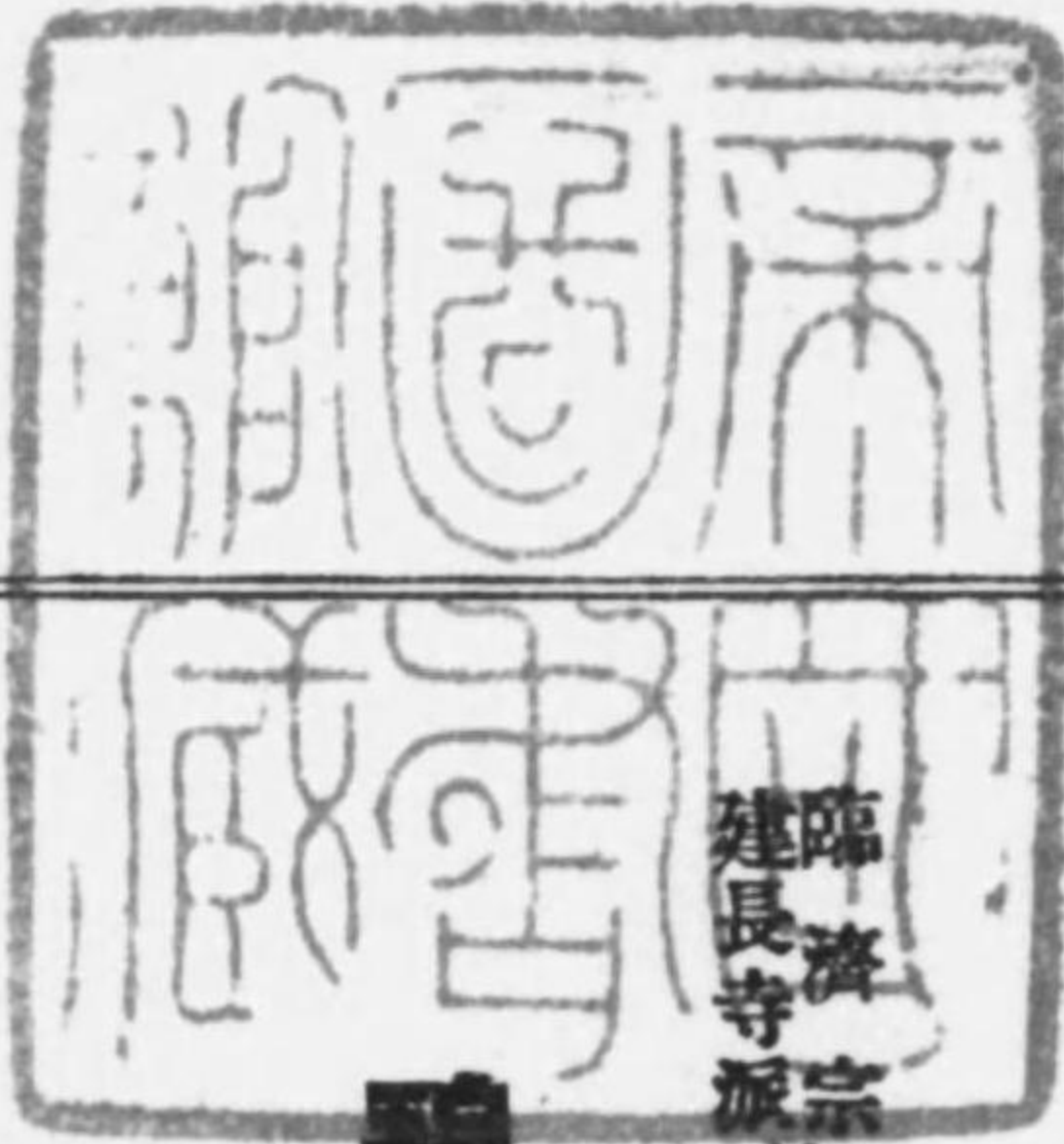
碧巖錄講演 (其二十一)



始



持260
210



臨濟宗
建長寺派

管長

菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其二十一)



碧巖錄講演其二十一目次

第五十五則 道吾一家弔慰……………一頁
 第五十六則 欽山一鏃破三關……………二五頁
 第五十七則 趙州田庫奴……………四四頁
 第五十八則 趙州分疎不下……………六一頁

碧巖錄提講

第五十五則 道吾一家弔慰

◎垂示

垂示云、穩密全眞、當頭取證、涉流轉物、直下承當、向擊石火、閃電光中、坐斷誑訛、於據虎頭、收虎尾處、壁立千仞則且置、放一線道、還有爲人處、也無、試舉看、

讀方

垂示に云く、穩密全眞、當頭取證、涉流轉物直下承當。擊石火、閃電光中に向つて、誑訛を坐斷し、虎頭に據つて虎尾を

收むる處に於て、壁立千仞なることは、則ち且く置く。一線道を放つて、還た爲人の處有りや。いな。試みに擧す看よ。』字解、分解。

穩密、是は悟の當體。云ふまでもない、穩は安穩、密は綿密。如何なるものが眞箇の穩密か、蓋し悟より穩密なるものなし。』

——全眞、穩密なる處が全眞、全眞なる處が穩密。斯くの如くでなければ穩密も眞の穩密に非ず、全眞も眞の全眞に非ず。

斯くの如くでこそ、始めて穩密は眞の穩密となり、全眞は眞の全眞となる。』——當頭取證、當頭は觸處と云ふこと。柱に逢うては柱、障子に逢うては障子、机に逢うては机、山に逢うて

は山、川に遇うては川。總て見るもの、聞くもの、そのものそれに使用せられず、處々眞、處々眞、隨處に主となる、それが當頭取證。』——涉流轉物、是は隨緣赴感底。云ひ換へれば和泥合水、下化衆生の遊化三昧。俗に世交術と云ふ、それに似てをる。——此の涉流轉物は、穩密全眞、當頭取證の人にあ

らざれば、我物を轉ずるに非ずして却て我物に轉ぜらるゝ。』——直下はその場、その時。其の場を去らず、其の時を移さ

ず。』——承當は一致、ピッタリ。方木を圓孔に入れるでなく、水と水、火と火と相合するが如きを云ふ。——一線道、戦争の方から云へば一筋の血路、法の上から云へば第二義、禪の立

場から云へば一手許す、と云ふこと。

四

提講。

苟も禪僧(禪僧に限らず)たるものは穩密全眞、當頭取證、涉流轉物、以上の總てに於て直下に承當し得る拔群の敏腕と絶世の道眼あるに非ざれば、擊石火、閃電光、その間に處して白黒を辨別し、虎頭に乗つて虎尾を收むる藝當は出來ぬ。されど若し爲し得る底の漢あらば、可謂、壁立千仞と。——古往今來、壁立千仞の人なきに非ず。一線道を放ちて人の爲にする、其の人甚だ尠し。一線道を放つ其人は何人ぞ。

◎本則

舉、道吾、與漸源、至一家弔慰、源拍棺云、生邪死邪、吾云、生也不道、死也不道、源云、爲什麼不道、吾云、不道不道、回至中路、源云、和尚快與某甲道、若不道打和尚去也、吾云、打即任打、道即不道、源便打、後道吾遷化、源到石霜、舉似前話、霜云、生也不道、死也不道、源云、爲什麼不道、霜云、不道不道、源於言下有省、源、一日將鉢子於法堂上、從東過西、從西過東、霜云、作什麼、源云、覓先師靈骨、霜云、洪波浩渺、白浪滔天、覓什麼先師靈骨、(雪竇著語云、蒼天蒼天)源云、正好著功、太原孚云、先師靈骨猶在、

五

舉す。道吾、漸源と一家に至つて弔慰せり。源、棺を拍つて云く、「生か死か。」吾云く、「生とも也た道はじ、死とも也た道はじ。」源云く、「什麼としてか道はざる。」吾云く、「道はじ道はじ。」回つて中路に至つて、源云く、「和尚快かに某甲が與に道へよ。若し道はざれば、和尚を打ち去らん。」吾云く、「打つことは即ち打つに任す。道ふことは即ち道はじ。」源、便ち打ちぬ。後、道吾遷化せり。源、石霜に至つて前話を舉似す。霜云く、「生とも也た道はじ、死とも也た道はじ。」源云く、「什麼としてか道はざる。」霜云く、「道はじ道はじ。」源、言下に

於て省有り。源、一日鋤子を將つて法堂上に於て、東より西に過ぎ、西より東に過ぐ。霜云く、「什麼をか作す。」源云く、「先師の靈骨を覓むるなり。」霜云く、「洪波浩渺、白浪滔天、什麼の先師の靈骨をか覓む。」(雪竇著語して云く、「蒼天蒼天。」)源云く、「正に好し功を著はすに。」太原の孚云く、「先師の靈骨猶在ますがごとし。」

字解、分解。

道吾は、石頭、藥山、道吾と相承して達磨大師十世の法孫であると云ふ。潭州の道吾山に住し名は圓智と云ふ。——漸源は道吾の法嗣。後に師と同じく潭州の漸源に住した仲興禪師の

こと。今は修行中、道吾山の典座を勤めて居りし時の一事。』

——弔慰は、葬式のお悔みに、と云ふこと。』——棺は死人の入れてある桶のこと。——回至中路は、歸りの途中で。』

——快は速、サア人の見ない中、人の知らない中、とせきたてる底。』——去は茲に限り歩行の去るでなく、俗に云ふ「やつつける」に相當する。つけるの意、やつてのけるの心。』——

遷化は宗師家の死去を云ふ。』——有省は、多少のみこめた、少々氣が付いた。』——鉢子は農業用のくわ。子は接尾の辭。』

——覓什麼云々、何ものを尋ぬる、先師の靈骨にかけて。』——洪波云々、見る限り大海の白波だ。否、佛海の性波だ。

此の外に靈骨などがあるものか。』——蒼天々々は、アア悲しい、アア氣の毒だ。悲哀、愁傷の意。』——著功は先師の功績を顯揚し以て謝恩の赤誠を表することなり、と井上君は云うて居らるゝ。』如何にも云ひ得て當れり。蓋し井上君も著功の御一人である。——猶在は、先師猶在すが如し、と云ふ人もあるが、先師茲に在り、と見る方が所謂禪的である。

提講。

茲に何人も嫌ふ死と云ふことに關する禪的問答がある。一日、道吾が漸源をつれて或家の葬式に立會つた。(今日若し會葬して道吾と漸源のやられた商量をやらうものなら大變だ。幸に左

様なことをする人がなくて、とは云ふものゝ一面から見れば、普通在家の人は兎も角も、出家沙門であるならば、口に出して云はんでも心中に於て多少考究すべきである。漸源、平素生死につき深く研究して居つたものだから、是れ幸と死人の棺桶をたゞいて、此の中の人物は生きてゐるのか死んでゐるのか、と道吾禪師に質問の矢を放つた。『親戚や遺族の人が愁傷して座席に居るのが目に入らぬと見える。何事も斯くの如く熱心でなければ成功はしない。さう云うたからとて、それが此の上もなによき事と誤認して、葬式の度毎に、此の二の舞をされては迷惑千萬だ。』——漸源は生死の二途に迷ひ疑つて居ることを自

白した。苟も生死の如何を窮めんと欲せば他人に向つて問ふべきものに非ず。自己に向つて問ふべし尋ぬべし。然るに多くの人が自己の生死を人に尋ね人に問うて、安心をしようの立命をしようのと思ふは抑々の不心得である。『自己の空腹は自己よく知る。自己の空腹を人に問うて何のためになる。寧ろ問はざるがまし。好し妙答があつても自己の空腹は依然として空腹。自己の空腹を醫さんと欲せば自己で飯を喫すべし。生死の事も亦復然り。』——道吾曰く、「生とも道はない。死とも道はない。生死は假の名だ。元來生に生なし、死に死なし。眞箇生死を知らんと欲せば、生の時は生に徹底し、死の時は死に徹底すべし。

生に徹底せずして生を知り、死に徹底せずして死を知る。恰も火に入らずして火を知り、水に入らずして水を知るが如し。豈恁麼の道理あらんや。」——源云く、「なぜ道はないのであります。」と押し込んで来た。此の押し込んで来たそのものは生か死か。生とも道はじ死とも道はじ。——道吾云く、「道はない道はない。」と道うて居るではないか。——道吾の道はじ道はじは可謂、百味具足と。押し問答して居る中に葬式は終つたものと見える。歸る途中で漸源は道吾をせめつけた。(此の事に熱心なること實に敬服。衲等に此の熱心あらば百年の昔に生死を解脱してをる事であらう。)源云く、「和尚さん、茲には幸に何

人も居りません。はやく生死の返事をして下さい。若し返事をして下さらなければ打ちますぞ。」——(打ちますぞ、などと云はずに先づ打つてから返事を迫つたら或は道うたかも知れぬ。)道吾云く、「打つなら打つがよい。生死の問題なら道はぬぞく。」流石道吾だ。云ひ得ることが出来るなら誰でも云ふ。云ふことが出来ぬから云はぬのである。然るに道理に不明なる人は、云ひ得ざることを叨に云ふ。それが爲に己を過まり人を迷はす。道吾の如きは道理に徹底して居るから云ひ得ざることは決して口外せぬ。——漸源、道吾が道はじ道はじの一點張り、是が何よりの親切爲人の處であることを知る力なきがため

に、先に云うた通り打つた。——好打は好打であるが遅八刻、おそいく。打たれた其の爲では無論あるまいが、其の後ほど經つて、諸行無常、人生朝露の格言に漏れず、道吾禪師、寂滅往生なされた。漸源は何と思はれたか衲が忖度すべき所でない。されど人情として何か心に深く考ふる處があつたと見えて、石霜和尚の門下に身を投じ、前の話を一々呈出して益を請はんとした。すると君子は千里同風で、道吾と同じ様に、「道はじく。其の問題に就ては生とも死とも道はぬく。」茲に於て漸源の家風か主義か、道吾に迫つた如く「何故に道はざるや。」と押し込んだ。石霜、道吾と轍を同じうして、「道はじく。」と明月清

風を拂うた。不思議々々々、漸源は石霜の不道々々を聞くや言下に省有り、で聊か其の道理を反省した。今回は道はざれば打つと云はず、そのまゝ石霜門下に止まつて修行された。——

縁は異なるもの、道吾の處に縁なくして石霜の處に縁あり。(世間の事柄も往々斯くの如きことあり。)小省は大悟の始、小省なければ大悟なし。漸源は次第々に修行が進み、人の知らざる中に大悟の大歡喜を得たものらしい。大悟して見ると道吾の大慈大悲の御恩が分つた。サア嬉し涙をこぼさずには居られない。

——そこで源、一日作務に出た其の序に、農業具の鋤子をもつて法堂上に於て、西より東に、東より西に、往きつ戻りつさ

れた。——是は如何なる意味、漸源其の人にあらざれば佛祖と雖も知る能はず。——石霜、其の穩密全眞、當頭收證底を見て、「何するのだ。」と悟底の深淺を計る尺棒を入れられた。源云く、「先師の靈骨を覓む。」と。——どこに先師の靈骨がある。

——東西南北、去來の外に先師の靈骨があるか。——石霜、第二杓の惡水を灌いで云く、「洪波浩渺、白浪滔天。三千大千世界、何れの處にか塵埃あらん。況んや先師の靈骨をや。迷ふまいぞ。うろたへまいぞ。——是は石霜が漸源を勘破する親切爲人の慈悲。——（雪竇禪師、石霜に共鳴して、「蒼天々々、ア悲しい悲しい。」何がそんなに悲しいか。珊瑚枕上兩行淚、半

是思君半恨君。」一班は漸源、——一班は石霜。）源云く、「正好著功。」その無き所に向つて先師の靈骨を覓むる、それが先師の功勞を表彰する寸志である。」と涉流轉物を露堂々に放出した處は實に石火電光も及ばぬ處。——太原の孚上座は漸源の悟得底に感仰して云く、「先師靈骨猶在。」道吾禪師、これはく相變らず御健康で接化度生、恐入りました。——即今、道吾禪師はどこに、何をして御座る。漸源はどこに居るか。——一々點驗し來れ。云ふ勿れ、十方無影像、三界絕行蹤と。——

◎頌

兔馬有角、牛羊無角、絕毫絕釐、如山如岳、黃金靈骨今猶

在、白浪滔天何處著、無處著、隻履西歸曾失却、』

讀方

兎馬に角有り、牛羊に角無し。毫を絶し釐を絶し、山の如く岳の如し。黄金の靈骨今猶在すがごときも、白浪滔天何れの處にか著はさんや。著はすに處無けん。隻履、西に歸つて曾て失却せしものを。』

字解、分解。

兎馬有角、牛羊無角、有りと云ふも無しと云ふも其の人其の人の見やうに依る。』有りと云はば有りとや人の思ふらん、答へもぞする山彦の聲。兎馬有角。——無しと云はば無しとや人

の思ふらん、答へてもなき山彦の聲。牛羊無角。——色即是空、——空即是色。——生死も亦復然り。——絶毫絶釐、是は第一義諦を云ふ。上諸佛なく下衆生なし。今日で云ふ絶對の眞理、そのまゝの當體。——如山如岳、絶對の眞理が歴々分明、何人にも見える。巍々たる山がそれだ、洋々たる海がそれだ。之是の巍々たるまゝ、洋々たるまゝ、毫を絶し釐を絶し、見るべきもの取るべきもの、一もあることなし。——黄金靈骨今猶在、是は太原が先師靈骨猶在と云うた、それを頌じたもの。——白浪滔天何處著、是は石霜が先師の靈骨などあるものかと云はれた、それである。——無處著、別に出し様がな

い、外に顯し様がない。白浪滔天の外に靈骨があるか。——
毫を絶し釐を絶し、どこに靈骨がある。—— 隻履、是は達磨
大師の傳説に依つたものである。聞く、達磨大師は光統律師、
流支三藏に、六たび毒を飲まされ、非命の死を遂げた。遺骸を
熊耳山に葬られた。達磨大師の死後三年、魏の使、宋雲が、歸
途、葱嶺（支那の天山南路を経て印度にはいる途中にありと云
ふ。嶺の全面、葱が茂生してをる故に葱嶺と云ふ。）に於て隻
履を持し印度に歸る達磨大師に逢うた。宋雲が支那に歸り、此
の隻履問題から、それではと云ふので熊耳山の墓を發掘して見
ると、驚くべし空棺にして一隻の革履あるのみ。—— それと

同じく道吾禪師も或は然らん。さすれば功を著はすにも手のつ
け様がない。—— 失却、とりにながした、なくした。何を、茲
では達磨大師を。——

提講。

普通一般の人は牛羊には角があり兎馬には角がないと思つて
をる。然るに雪竇禪師は其の反對に、兎馬には角があり牛羊に
は角がない、と云はるから如何にも不思議だと思ひなさるで
あらうが、寧ろ思ひなさる方が不思議だ。元來法（眞理）には
定形なし。有と云ふも無と云ふも相對上の假名。大と云ふも小
と云ふも差別上の符號。そのものそれには大も無ければ小も無

い。有もなければ無もない。それが法、そのまゝが絶対的平等の眞理である。その立場から云へば、有りが有りてなし、無しが無しでなし。時には有り、時には無し。随つて生死も亦然り。看よ、毫を絶し、釐を絶したる其の法、そのまゝが山となりては巍々然、海となりては洋々焉。——洋々焉たり巍々然たる、そのまゝが毫を絶し、釐を絶してをる。無と云ふ立場から見れば毫釐も生死はない。有と云ふ位置から云へば山岳の如く生死はある。ありと云ふも實にあるに非ず、なしと云ふも實になきに非ず。雪竇禪師、有の方面から太原の孚上座の意旨を採り、黄金靈骨今猶在、先師の靈骨は宇宙全體に充滿して居ると云ひ、

——無の方面から石霜禪師の胸中を察し、白浪滔天何處著、先師の靈骨は盡天地間どこにもない、と云はれた。知るべし、無、必ずしも無にあらず、兎馬に角あり、有、必ずしも有に非ず、牛羊に角なし。恁麼の法理に到達せざる人は、生と云へば生に迷ひ、死と云へば死に迷ふ。生死元來一如、生死畢竟不二。生死は法海の波浪。——更に雪竇禪師、慈悲婆言を弄して云く、隻履西歸曾失却。——達磨大師の骨は熊耳山に葬つたと思ふたら、隻履を携へて印度に歸られた。歸られたが本當か、——熊耳山に葬られたが本當か。本當と云へば何れも本當、本當でないといふと云へば何れも本當でない。之是が達磨大師の生死解脱底。

二四
——生とも云はじ死とも云はじ。生にして生に非ず而して生、死にして死に非ず而して死。道はじ道はじ、眞箇の達磨大師を取逃がすな。眞箇の道吾禪師を取逃がすな。眞箇の石霜禪師を取逃がすな。否、眞箇の自己を取逃がすな。——さう云ふ中に既に失却。

(昭和十三年十二月十七日講演)

第五十六則 欽山一鏃破三關

◎垂示

垂示云、諸佛不曾出世、亦無一法與人、祖師不曾西來、未嘗以心傳授、自是時人不了、向外馳求、殊不知自己脚跟下一段大事因緣、千聖亦摸索不着、只如今、見不見、聞不聞、說不說、知不知、從什麼處得來、若未能洞達、且向葛藤窟裏會取、試學看、

讀方

垂示に云く、諸佛曾て出世せざりしならば、亦一法の人に與

ふるもの無く、祖師曾て西來せざりしならば、未だ嘗て心を以て傳授することなからん。是に自つて、時人了せず、外に向つて馳求し、殊に、自己の脚跟下は、一段の大事因縁にして千聖も亦摸索不着なることを知らず。只、如今、見不見、聞不聞、說不說、知不知、は何處の處よりか得來る。若し未だ洞達すること能はずば、且く葛藤窟裏に向つて會取せよ。試みに擧す看よ。」

字解、分解。

諸佛、過去の佛も現在の佛も未來の佛も一括して諸佛と云ふ。——祖師、達磨大師のこと。印度の二十八祖にして支那

の初祖。——自是、これによつて、これがために。——時人、其の當時の人に限らず廣く一般の人。——脚跟下、跟はクビス、あしもとと云ふこと。——摸索不着、法の本體、眞理の面目は、見不見、聞不聞、說不說、知不知、である。

提講。

第一義諦から云へば、諸佛出世せざる以前、初祖西來せざる以前、法もあり禪もあり。然れども其の法の法たる所以を知り禪の禪たる所以を知り得たるは諸佛の出世に依り、初祖の西來に依る。故に圓悟禪師曰く、「諸佛が曾てこの世に出なかつたら佛法と云ふものはなき筈。又一法の人に與ふべきなきは理の當

然。初祖が西來しなければ以心傳心と云ふ神秘の法もなき筈。」敢へて不立文字、教外別傳などと云ふ必用なし。故に或人は云ふ、「諸佛や初祖が佛法とか禪道とか云ひ出して自分でよき商賣を始めたのである。」と。今日の宗教者は或は然らん。古聖賢は然らず。無邊の衆生を救濟せんが爲に、出世もし、西來もなされたのである。處が或人は諸佛の本懐、初祖の心底がどこにあるやら毛頭知らぬから、——一々外界に向つて探求すること、牛に騎つて牛を求むるが如し。知らずや、自己脚跟下に露堂々、明々白々に一段の大事因縁のあることを。(法華經に、佛は一大事因縁の故に世に出現す、とある。その一大事因縁とは一切衆生

をして開示悟入せしむること。)所謂轉迷開悟の機會も資料も場處も、それ、その、柳に、これ、この、櫻に、頭々上に明かに、物々上に出て居る。——されど法は青黃赤白黒の色に非ず。法は長短方圓の形に非ず。日中寶石、色に定形なきに彷彿として、水上葫蘆、按著すれば轉ずるに依稀たり。——何が故に然るや。見んとして見え、聞かんとして聞えず、説かんとして説く能はず、知らんとして知る能はず。——千聖と雖も摸索不着、サア此の摸索不着底の見不見、聞不聞、説不説、知不知、畢竟如何なる處より得來る。自己に返照して知るべし。他に求めず冷暖自知すべし。若し未だ恁麼の法理、禪境に洞達せざる

人あらば、速すみやかに去つて本則に參ずべし。

◎本則

舉、良禪客問欽山、一鏃破三關時如何、山云、放出關中主、看、良云、恁麼則知過必改、山云、更待何時、良云、好箭放不着所在、便出、山云、且來闍黎、良回首、山把住云、一鏃破三關、即且止、試與欽山發箭看、良擬議、山打七棒云、且聽、這漢疑三十年、

讀方

舉す。良禪客、欽山に問ふ、「一鏃破三關の時如何。」山云く、「關中の主しゆを放出せよ。看ん。」良云く、「恁麼いんまならば則ち過つ

ては必ず改むるを知れ。」山曰く、「更に何の時を待たん。」良云く、「好箭かうせん放てり、所在すなはを着けず。」便ち出づ。山云く、「且しほく來れ闍黎。」良、首かうんを回めぐらす。山把住はぢゆうして云く、「一鏃破三關は即ち且しほく止らん。欽山が與たみに箭やを發はてよ。看ん。」良、擬議ぎぎす。山打つこと七棒して云く、「且しほく聽またん。這の漢、疑ふこと三十年ならん。」

字解、分解。

良禪客、巨良ころうと云ふ人だと云ひ傳へてをります。禪僧の武者修行と云ふ格の人らしい。—— 欽山、洞山悟本禪師の法嗣、澧州欽山の文遂ぶんすい禪師のこと。—— 一、鏃破三關、一本の箭で三

つの關所を破つたら、と云ふ意味。云ひ換へれば一超直入如來地。——放出、追ひ出すこと。一休が小僧の時、御主君の前で、屏風畫の虎を追ひ出して、と云うたが茲にある放出だ。

看、こゝでは軽く助動詞に用ふべし。——知過必改、

過つては必ず改むるを知れ、と命合法に訓讀すべし、と井上君の説。至極面白い。武者修行の禪客としては斯くあるべきである。——不着所在、あてがはずれた、むだことをした。——且來、一寸おいで、一寸お待ち。——擬議、躊躇すること。云はんと欲して云ふ能はず、述べんと要して述べ得ざる底。——且聽、唐宋時代の俗語。日本語の、見てをるがよい、と云ふこ

とだと井上君の垂示。如何にも的説。——
提講。

明治の始に、禪宗の寺を恐喝して衣食する一種の居士があつた。威風堂々、手に如意を持ち、口に禪語を弄し、首に絡子（たすき）をかけ、僅かに瞥見したる見識をふり廻し、力の乏しき禪僧と見ると思ふ存分油をしばり、其の上多少の芳志を申入れ、力のある禪僧と見ると平身低頭してお世辭をふりまく。居士に限らず雲水僧にも、以上の動作をなして各寺院に迷惑をかけた例至つて多し。此の本則に出て居る良禪客も或は一種の世渡り僧で、外面は禪家の武者修行であるが、其の内面は禪を笠にかぶり衣食

の爲に禪寺をあらし廻る佛口蛇心の一族であるかも知れぬ。」

——良禪客、ある日、欽山の處へやつて来て、突然、「三つの關所を一本の箭で破つた時は如何でありますか。」と欽山を頭から呑んでかゝつた。(三關とは、三大阿僧祇劫のことか、三觀のことか、三句のことか、三世のことか、三毒のことか、三身のことか。)圓悟禪師は、嶮と下語された。一鏃破三關の箭を向けられたら、如何なる者でも命はない。欽山禪師危険で御座るぞ。此の時、義經すこしも騒がず、「破三關をしたら、關中の主人公を拙僧が面前へ引つばつて來い。」——若し良禪客以上に力ある破衲子であれば、此の時如何に働くべきや。深く注意す

べき處である。——良禪客、欽山の、追ひ出せ看よ、と云はれた其の口上が癢に障つたものか、聊か言葉に力を入れ、「私が關中の主人公を引き出して來たら、アナタは自己の失言を知つて私の前に謝罪をなさい。」——憐むべし、良禪客は既に欽山のために腹中を洞觀された。——「ハ、ア貴殿が關中の主人公を追ひ出して來るのは何時のことか、マア當にはなるまい。」良禪客、目の色をかへて云く、「意外に話のわからぬ和尚だ。(御自身は話がわかつてをるか。)折角好箭を放つたのに手答へがない。嗚呼放ち損をした。長居は無用。」と云ひながら便出、ス——と出てしまった。」是では破三關と云ふものゝ、其の實、破三

關をしてをらぬ事が明白。破三關をせずして欽山和尚を勘破しようとする勇氣は賞すべきであるが、力の足らざるを知らずして向ふ、其の無鐵砲は實に笑ふべし憐むべし。—— 看るべし欽山和尚の腕力を。山云く、「且來闍黎。」マアく、待ちたまへ。その様に腹を立てるものでない。チヨツトくこゝへおいで。良禪客はお茶でも頂戴が出来るかと思つて首を回らした。欽山は電光石火猶遲と云ふほどの速さで良禪客の胸を把住して云く、「一鏃破三關はマアそれでよしとして、其の三關を射破する其の箭で此の欽山を射て見よ、サアサア。」良禪客、欽山に不意を打たれて、シドロモドロ。之是を龍頭蛇尾と云ふ。初の

勢どこへやら。—— 此の哀むべきさま。諸君、良禪客に代つて欽山をウーと云はせる働はなきか。—— 残念なことをした。擬議したために欽山からビシヤくと七棒を頂戴した。さぞ痛かつたであらう。欽山、七棒を與へ其の上に更に追加して「此の未了の漢、諸君、見て居たまへ。コヤツは以後三十年もしたら眼が醒めるであらう。マアそれまでは今日のまゝ、不相變、盲蛇で四海五湖をのたり回るであらう。」と記別を與へられた。—— 昭和の今日、良禪客の如き羊頭狗肉の人、蓋し尠か
らず。

◎頌

與君放出關中主、放箭之徒莫莽鹵、取箇眼兮耳必聾、捨箇耳兮目雙瞽、可憐一鏃破三關、的々分明箭後路、君不見、玄沙有言兮、大丈夫先天爲心祖、』

讀方

君が與（あ）に放出（は）す關中（くわんちゆう）の主。放箭（は）の徒、莽鹵（まうろ）なること莫（な）れ。箇（こ）の眼を取れば耳必ず聾（な）し、箇の耳を捨（す）つれば目雙（ふた）ながら瞽（こ）す。憐（あは）むべし一鏃（いっさく）破三關（さんくわん）と。的々（てき）分明（めい）なり箭後（せんご）の路。君見（み）ずや、玄沙（げんしゃ）言へること有るを。「大丈夫（だいぢゆう）天（てん）に先（ま）だつて心の祖（そ）たり。」と。

字解、分解。

莽鹵、うつかりして居ること。不注意なこと。苟且（こうじ）の義。——
取捨、茲では箭の放ち方の難しきことを云ふ。——的々、是は箭路が能く分る射術の拙劣なる點を示したるもの。——玄沙、福州閩縣（みんけん）の生れ、三十才まで南臺江で漁夫をしてをられた人。雪峰下である。——大丈夫、實は男子のこと。茲では廣義に解し、苟も人間たるものは、と云ふ心なり。——先天、天地未分以前、又は先天的。——心祖、實在の神、實在の佛。

提講。

雪竇（せつたう）禪師は例に依つて例の如く本則そのまゝを我物にして、

君がために放出す關中の主、と頌ほめじられた。關中の主は如何なる面目をしてをる。諸君、知るや知らずや。別に珍奇なものではない。或人は宇宙に瀰漫して居る神の實體と云はるゝが、其の神の實體とは如何なるものか。心外しんがいに求めたら大なる錯誤さくご。然らば心内しんないにか。心内に求めても錯誤さくご。如何せば可ならん。曰く、云ひ難し。茲が各自に研究すべき處。故に云ふ、放箭の徒、莽鹵まうろすること莫れ。苟も關中の主を箭で射とめようと思はば大いに注意を要す。うっかりして居てはならぬ。由來關中の主は容易に射とめられぬ。古今に名高き射術者でも見損じたり射損じたりする其の例至つて多し。—— 試みに射術の方法、其の

一班を云うて聞かさう。方に箭を放たんとする時、耳の方に注意すると眼の方がおるすになる。眼の方に氣をくばると耳の方がおるすになる。弓に氣を取られても箭に氣を取られても的に氣を取られても、氣を取らるれば氣を取らるゝだけ片寄る。さればと云うて弓にも氣を取られぬやうに、箭にも氣を取られぬやうに、的に氣を取られぬやうに一切捨ててかゝれば是れ又一方に片寄る。取るも捨つるも、捨つるも取るも、何れも不可なり。その不可なる様子を、箇の眼を取れば耳必ず聾し箇の耳を捨つれば雙眼瞽す、と頌ほめじられた。眞箇、不取不捨の境地に入らざれば、一鏃破三關は到底出来るものではない。然るに不

取不捨の境地に入らざる下手くそでありながら、一鏃破三關時如何などと見事に關中の主を射とめた如くに鼻高々と自慢するが、看よその箭の放ち方を。マルデ物になつてをらぬ。的々分明箭後路、箭の飛んで行く路が人の目に見える。——良禪客は自己以外に關中の主がありと思つて居る。故に欽山に問ふ其の始から擬議の終に至るまで、徹頭徹尾、莽鹵まがうならざるなし。關中の主は人々の脚跟下、否、人々がそれだ。外に關中の主があるか。雪竇禪師、注意を喚起して曰く、「君見ずや、諸君の見て居らるゝ通り、諸君の知つて御座る如く、玄沙禪師は、大丈夫に先だつて心の祖となれ、と申された。普通は天を以て萬

物の始となし、心を以て萬法の元となす。今は然らず。眞箇大丈夫と云はるゝ者は心の祖とならざる可からず。」と。——心の祖それが關中の主。眞箇關中の主となり來らば、三世の諸佛も歴代の祖師も一箭に射貫することが出来る。況んや其の他の物に於てをや。畢竟如何。大丈夫先レ天爲ニ心祖一。——

(昭和十四年一月十四日講演)

第五十七則 趙州田庫奴

◎垂示

垂示云、未透得己前、一似銀山鐵壁、及乎透得了、自己元來是鐵壁銀山、或有人問且作麼生、但向他道若向箇裏、露得一機、看得一境、坐斷要津、不通凡聖、未爲分外、苟或未然、看取古人樣子。」

讀方

垂示に云く、未だ透得せざる己前には、一に銀山鐵壁に似たるも、透得し了るに及んでは、自己元來鐵壁銀山ならん。」或

は人有りて、「且く作麼生。」と問はば、但他に向つて、「若し箇裏に向つて、一機を露得し、一境を看得せば、要津を坐斷して凡聖を通ぜざらんも、未だ分外たらず、苟も未だ然らざれば、古人の様子を看取せよ。」と道はん。」
字解、分解。

透得は大悟のこと。因地一聲、それである。——銀山鐵壁は難關のこと。如何ともなし得ざる底にして、壁立千仞と同意。問且云々、未透得と透得了との問題につきて。——箇裏、禪僧平素使用の文句、時に依り這裏とも云ふ。茲では、この人生に於て、この宇宙間に於て、などと云ふ意に解すべし。

露得、看取、兩語何れも認識、把住、活用、と見て大差なからん。——不通凡聖、是れは銀山鐵壁、それである。——分外、非凡、絶倫、超格、と同意。』——
提講。

例の如く圓悟禪師が座下の人に垂示して曰く、生死、凡聖、是非、得失の相對に迷うて、宇宙の全眞を悟り得ざる己前にあつては、吾人の周圍にある一切の事物が總て不可解、不思議に見えて、一々煩悶苦惱の種とならざるなし。其の窮窟さを譬へて云へば、銀山鐵壁に圍繞せらるゝが如し。大内君は、「東坡が盧山烟雨浙江潮、未到千般恨不消、と云はれたのは、蓋し此の

様子を吟じたものである。」と。果して然るや否やは東坡に聞かざれば不明であるが、多少其の意なきにあらず。』されど一旦自己が宇宙の全眞を手に入れて見れば、自己が宇宙の全眞それであるから、相對的の迷妄繁雜そのまゝ、鐵壁銀山となる。

——此の鐵壁銀山には三世の諸佛も歴代の祖師も手の着けやうはない。云ひ換へれば自己是れ絶對的の實在者である。茲の處へ大内君は又、「東坡の到得歸來無別事、盧山烟雨浙江潮、と云ふは、このことなり。」と意見を添へて居らるゝ。或は然らん。——（未透得己前は祖師の關（公案）を透り得ざるが爲に心路の自由を缺く。故に總てが心外にあつて銀山鐵壁。』——透

得了已後は祖師の關(公案)を透り得たるが爲に心路の自由を得たり。故に一切が自己。自己の外に一物なし。自己是鐵壁銀山。

—— 茲に人あり、透得了底如何と問ふあらば、只他に向つて云ふ。箇裏、之是の宇宙に吾人の眞理を徹見すべき手段に供するもの、自己の道眼を開く手引をするもの、濱の眞砂より多し。柳の緑を見ても花の紅に對しても、山の高き海の深き、火の熱、水の冷、行雲流水、松風竹韻、林檎の落つる、湯氣の吹く、總てが眞理徹見の手引にして道眼廓開の案内にあらざるなし。

—— 故に一切處、一切事に對し寸毫も油斷なく、そのもの、それと不二一體、彼我一如になり得たる眞の當體を、一機を露

得し一境を看得すと云ふ。果して恁麼に徹底し廓開し來らば、銀山鐵壁、鐵壁銀山、—— 佛祖と雖も顔出しはさせぬ。況んや其の他の者に於てをや。—— 是を要津を坐斷すると云はずして何とか云はん。—— 是を凡聖を通ぜずと云はずして何とか云はん。—— 分外の事と思ふまいぞ。禪者の平常底である。禪者の茶飯底である。—— 即今斯くの如き禪者ありや。なきが當然。菩提心が缺乏してをる。—— 苟も自己銀山鐵壁となり超宗越格の大自由大自在を得て一切衆生を濟度せんと欲する禪者は古人の様子を手本にし以て自己銀山鐵壁となるべし。切に勧め強ひて望む。

◎本則

舉、僧問趙州、至道無難、唯嫌揀擇、如何是不揀擇、州曰、天上天下唯我獨尊、僧曰、此猶是揀擇、州曰、田庫奴、什麼處是揀擇、僧無語、

讀方

舉す。僧、趙州に問ふ、「至道無難、唯嫌揀擇、如何か是れ不揀擇。」州曰く、「天上天下唯我獨尊。」僧云く、「此れ猶是れ揀擇なるがごとし。」州曰く、「田庫奴、什麼の處か是れ揀擇なるぞ。」僧、無語。」
字解、分解。

趙州禪師は既に御承知、改めて申上げません。僧は無名、普通の禪僧。——至道無難、此の説明は第二則の處で一應お耳に入れました。三祖鑑智禪師の作られた信心銘、其の冒頭の二句であります。——天上天下、是は佛陀誕生の時、佛陀自ら宣言なされた語として佛教家の尊敬する名高き文句であります。長阿含經に左の如く出てをります。從右脅出、墮地行七步、無人扶持、遍觀四方、舉手而言、天上天下、唯我獨尊、要度衆生、生老病死。——大乘佛教では、此の句は佛陀が人間各自の個性の絶對的なることを宣言なされたものなり、と信じもし且つ人にも語ります。禪家では個性の絶對的に共鳴して居ります。

田庫奴、庫は舎と相通。故に田庫奴は田舎奴のこと。土百姓めが、田舎つぼ、などと云ふ意で、人を輕侮する時に使用する俗語である。」

提講。

碧巖百則と云うても、一々眼に新なるもの、一々耳に奇なるものはありません。お互の眼に見なれたもの耳に聞きなれたものが半数以上であります。論より證據、また茲に三祖大師の信心銘じんごうの文句に關する一禪話が出ました。或僧が觀音院の從諗禪師じんごうに對し、禪師が平素拈提して人に示さるゝ三祖大師信心銘の二句につき問うて來た。「禪師は信心銘の文句を賛賞して、至

道無難、唯嫌揀擇とお示しになります、其の唯嫌揀擇はわかつてをります。不揀擇即ち揀擇しないと云ふことは如何なることとでありますか。」問僧もんそうの意を忖度するに、揀擇と云ふ言葉に捉へられ、何故に揀擇しては悪いか、と突込んだのであらう。』大悟せざる人としては尤なる質問である。——由來至道と云ふは至極の大道。』至極の大道と云ふは宇宙の眞理。宇宙の眞理は無難である。其の無難底を我物にする、それが大悟。故に大悟し來れば、吾人の朝夕實行しつゝある一切が宇宙の眞理。其の眞理が即至道。何の難きことかあらん。極めて容易である。之是の至道を強ひて難からしむる者は揀擇である。されど大悟

以前は一切が揀擇。大悟以後は一切が不揀擇。問僧の如きは未だ大悟せざるが故に一切が揀擇。趙州禪師の如きは既に大悟してをらるゝが故に一切が不揀擇。——趙州禪師は不揀擇の處より答へて曰く、天上天下唯我獨尊。——「人々が自己の天上天下唯我獨尊なることを自覺し自己以外の事相に支配せられざる、それが不揀擇である。」と。然るに問僧は自己が眞理に到達せざるに氣づかず、趙州禪師の云はるゝ天上天下唯我獨尊を相對的に解釋し、「天上と天下と區別し自己と他人と區別するやうではやはり揀擇に墮在して居るではありませんか。」と逆問した。趙州禪師茲に於て、「田庫奴、什麼處是揀擇。小癩なことを

云ふな。此の土百姓めが。天上天下唯我獨尊が、何でそれが揀擇か。」と不揀擇底を露堂々に放出された。——僧、無語は當然。——

◎頌

似海之深、如山之固、蚊蟲弄空裏猛風、螻蟻撼於鐵柱、揀
兮擇兮、當軒布鼓、』

讀方

海の深きに似、山の固きが如し。蚊蟲空裏に猛風を弄し、螻蟻鐵柱を撼かす。揀たり擇たり、當軒の布鼓。』
字解、分解。

似海、如山、是は趙州老古錐の智徳圓滿にして大用現前、規則に固執せざる無礙自在底を讚賞したものである。其の深きを云へば海の深きに似たり、其の固きを云へば山の固きが如し。如何に固きか、如何に深きか。其の深きを知らんと欲せば、親しく趙州禪師の性海に入るべし。其の固きを見んと欲せば、自ら趙州禪師の教山に登るべし。教山とは何か、性海とは何か。曰く天上天下唯我獨尊。直に是れ不揀擇の當體。——蚊蟲、螻蟻、是は問僧の輕舉妄動を弄した言葉。——猛風、鐵柱、是は趙州禪師の廣く且つ固き識見を讚したものの。——揀兮擇兮、それがそのまゝ、至道の端的、これがこのまゝ、無難の當體。

當軒布鼓は軒端にかけてある布張りの太鼓と云ふこと。其の意、(張子の虎)(畫にかいた牡丹餅)布張りの太鼓は眼に見ては美であるが、太鼓の用をなさぬ。本則の僧無語を頌じたもの。されど當軒布鼓には別に仔細のあるなり。

提講。

趙州禪師の境界は海の深きに似て山の固きが如し、と雪竇禪師は頌じられた。如何にも然りである。されど佛法の法海は由來底なし。故に漸く入れば漸く深し、其の深きは窮め盡しがたし。——佛法の法山は畢竟天上しらず。故に愈々登れば愈々高し、其の高きを極め竭しがたし。——諸君、趙州禪師を以て

法海の根源を盡し、法山の絶頂に達せりと思ふ勿れ。釋迦も達磨も法海の深きを探り、法山の高きを尋ねつゝある眞最中。」

斯く云ふは趙州禪師を輕視せよと云ふ意旨に非ず。趙州禪師すら既に然り。況んや我等に於てをや。層一層、勇猛精進して此の事三昧にならざるべからず、と云ふ老婆言である。更に雪竇禪師は趙州禪師の様子を空裏の猛風と鐵柱に擬し、其の泰然として堅固、而して圓轉無礙自在なることを示された。問僧の如きは蚊蟲、蟻、そのものそれだ。如何ぞ趙州禪師に敵對することが出来るものか。——趙州禪師は、一切事、一切處、總て是れ至道の端的。語默動靜、それ、それが天上天下唯我獨尊。

何れの處が揀たりだ。何れの邊が擇たりだ。——擇のまゝが不擇、——揀のまゝが不揀。——然るに揀なき處に向つて揀を求め、擇なき邊に強ひて擇を起す。それこそ、揀の揀たるもの、擇の擇たるもの。——僧の無語底、軒に當る布鼓と云ふべし。古語に、布鼓を持して雷門に向ふ勿れ、とある。雷門とは越の會稽の城門に置きて打ちたる大なる鼓。そこへ布で張りたる鼓を以て向うても無用のことである。『趙州禪師を城門の雷鼓に比し、問僧を布鼓に擬する人もある。——單に布鼓を趙州禪師の語には語相がないと云ふことに當てる人もある。何れも此の頌に對して朝三暮四、暮四朝三である。——

畢竟、布鼓とは如何なるものぞ。知らざれば去つて雪竇禪師に問ふべし。

(昭和十四年一月二十八日講演)

第五十八則 趙州分疎不下

此の則には垂示がありません。

趙州禪師は常に信心銘を愛玩なされたものと見えて、此の碧巖録中に前後四回(第二則、第五十七則、第五十八則、第五十九則)出て居ります。而して又雪竇禪師も趙州禪師と同じく信心銘には大なる興味を持たれたもの。故に信心銘に關する公案を僅々百則公案中に四回も拈提なされた。依つて知るべし、信心銘そのものは禪學上に於て必要缺くべからざる一の参考書であることを。』此の本則を研究するに當り先の第二則、第五十七

則、次の第五十九則を互に對照すると共に、信心銘そのものを根本的に心讀研究することを忘れては、徒らに葉を摘み枝を尋ぬることになります。初學者の爲に一言垂示の代りに添へて置きます。

◎本則

舉、僧問趙州、至道無難、唯嫌揀擇、是時人窠窟否、州云、曾有_レ人問我、直得五年分疎不下、

讀方

舉す。僧趙州に問ふ、「至道無難、唯嫌揀擇と、是れ時人の窠窟なりや否や。」州云く、「曾て人有り我に問ひしも、直に得た

り、五年分疎不下なりしことを。」
字解、分解。

時人、廣く世の中の人と云ふこと。——窠窟、窠は鳥の巢、窟は獸の穴。極めて窮窟。禪學上で、文字言句に執着し、古則公案に尻を据ゑ、一枚見識を振り廻す。『それ等を指して窠窟に落つると云ふ。——直得、ア—イと云ふ輕諾の言葉。——分疎、分別辨疏の意。——不下、不可能、返辭が出來ぬ。』

提講。

易には、再三すれば太だよろしからず、と云ふことがある様

に聞いてゐたが、此の本則に出てをる至道無難云々も再三であるから太だよろしからず、と云ふべきであるが、是は然らず。所謂、愈々出て愈々好し、轉々聞え轉々新なり、であります。

或人は、趙州禪師は信心銘を戀女房として御座る、と云ふが或は然らん。豈趙州禪師のみならんや。雪竇禪師も其の他多少なりとも禪に志す人は何れも戀女房とまではせずとも相應に愛翫して居ります。衲の如きも信心銘に岡惚れして居る一人であります。

僧あり、趙州に問ふ。——趙州禪師が常に此の至道無難、唯嫌揀擇、と云ふ三祖大師の語を拈提して人に示さるゝ處を見て、

「是時人窠窟なりや否。」さう同じことを云はるゝ禪師こそ、至道無難、唯嫌揀擇の窠窟に陥つて居るではありませんか。」(或一説では、禪師は人に向つて至道無難、唯嫌揀擇、と文句を繰返し繰返しして、その眞意義を確實に御示しくださらぬ。それでは世間の人を窠窟に陥し入れると云ふものであります。)と云うた處を見ると、此の問僧、多少腕に心得のあることが知れる。

圓悟禪師、問僧の窠窟なりや否やと云うた處へ、「己を以て人を妨ぐる莫れ。」と下語して御座る。如何にも謹聽すべき警句である。自己の罪は自己の罪、自己の罪を他人に負はしたとて自

己の罪は軽くはならぬ。此の見易き知れ易き道理を見ず知らず、自己を第二にして眞つ先に人を彼是と世話焼くは不心得である。』問僧の如き或は然らんか、と圓悟禪師のお世話焼。

衲なまは圓悟禪師の下語をそのまま、圓悟禪師に下語して、己を以て人を妨ぐる莫れ、と回敬致します。

趙州禪師は問僧に對し、「曾有人問我。アアさうく、君と同じ様に曾て詰問したものがあつた。——それは今から五年も前のこと。拙僧には其の辨明がまだ出來ずにをる。——是が至道無難の眞意義、——是が唯嫌揀擇の端的底。——然るに、ありもしない智恵を揮ひ、回りもしない舌を回らし、四の

五のと説明や解釋を下さば、自己の拙腹を晒すのみか、至道をして形なしにしてしまふ。誤認する勿れ。知らざるを知らずとせよと云ふ意に非ず。——一言添へておく。趙州禪師は俗談平話の中に佛祖の頂顛を坐斷する底の特長を所持して御座る老古錐。故に自己の拙劣なる杓子定木を以て測量するは勞して功なきのみならず、寧ろ自己の不見識を人前に晒すことになる。若し夫れ眞箇の處を知らんと欲せば趙州禪師その人の境致に到達せざれば總て是れ不可。』

◎頌

象王嘔呻、獅子哮吼、無味之談、塞斷人口、南北東西、烏

讀方

象王の嘖呻、獅子の哮吼、無味の談なるも、人口を塞斷す。

南北東西、鳥、飛び兔走る。』

字解、分解。

象王、獅子、是は趙州禪師に喩へたもの。偉人や傑士を象や獅子に喩へた其の例、佛典祖錄には處々に出てをります。――

嘖呻、是は象がクシヤミをしたりアクビをしたり、其の他、時と處により種々の面相をなすこと。――哮吼、ほえること。

敢へて獅子には限りません。――無味之談、思慮分別の及ば

ぬ處、それを無味の談と云ふ。必ずしも文字通り味がないと云ふのではない。寧ろ有味も有味も最上の美味である。――塞斷、何とも云へぬ様にする。口あんぐり、満口に霜を含む、と云ふの類なり。――南北東西は至道そのものの廣且大も自由自在なる底。――鳥、兔、讀んで字の如し。鳥に兔、強ひて日月と見るに及ばず。

提講。

趙州禪師が分疎不下と喝破せられた、それは大象のアクビが天地を震動させたより更に大なる響がある。猶獅子の如し。獅子一吼すれば百獸腦裂す、で、趙州禪師の分疎不下を聞いたら

佛祖と雖も氣を呑み聲を飲むであらう。されど趙州禪師以外の人が如何に分疎不下々々々と終日大聲に叫んでも、猫子一匹恐れはしない。何が故ぞ。分疎不下。——之は是の分疎不下は眞に無味の談。——無味なるが故に百味具足、百味具足するが故に一飽能く萬劫の飢を消す。處が大聲は里耳入らず、で、如何にも大物であるから一口に吸ひ盡す英傑漢がない。人口を塞斷す、と雪竇禪師の賞嘆せらるゝ、宜なるかな。——聞かずや、大道元無國境、修養豈有老少。至道は無難、東西南北、門戸なし。上下四維、墻壁なし。飛ぶも勝手、走るも氣儘。誰が汝を束縛する。自分と自分で束縛し、自分と自分で塞斷し、自

分と自分で分疎不下にす。——人々悉く光明のあるあり。何ぞ發揮せざる。——發揮せよ、發揮せよ。お互が象王となり、獅子となり、嘖呻して闇黒世界を震動させ、哮吼して惡魔外道を腦裂すべし。豈敢へて趙州禪師に譲らんや。——何が故ぞ。一人發眞歸源、十方虛空悉消殞。——

(昭和十四年二月十八日講演)

396
44

昭和十四年九月二日印刷
昭和十四年九月九日發行

著者
發行所
兼
者

佐々木 四郎

東京市日本橋區區町二丁目一番地一
三井合名會社內

發行所
東京市日本橋區區町二丁目一番地一
三井合名會社考查課

終

